



里見八犬傳 拾七編 卷四十二

13
709
93



門進 13
號 709
卷 93



明治三六年
十月九日
購

南總里見八犬傳第九輯卷之四十二上

東都 曲亭主人編次

第百六十九回

野坑を拾出されて親兵衛賜を受く
風葉を帝除して諸勇士立談

話表を大塚信乃成孝の料も葛西の底不知野の頭で大江親兵衛
仁が為小二騎の敵を斃して他が親山林夫婦の舊恩を報ひのさるる底
不知の坑に陥る。親兵衛も亦恙なく件の坑より吹起き勁猛風が吹騰され
けん馬故の儘ゆく出ることをゆるぐ。信乃が欽ひあづもあは眼と定めてつら
つらと見ゆ忻然として先向をう大江和殿の幾の間小京師よりかち来て今番の
役も参り會する況や二騎の敵を趕逐して諺てあの坑に陥りて見えざる一ふ
特な奇に坑中より白氣立升る事あり且猛可ふ吹き風の音雷延の响と



底不知野の
 去の
 信乃
 親兵衛を
 救ふ

八代将軍 徳川吉宗
 三
 八代将軍 徳川吉宗



八代将軍 徳川吉宗
 八代将軍 徳川吉宗

其芳名を自家の士卒中の敵中より知せしむ。欲する所の所行るれと心の誠
 うら出く。告もあつ。向も尋る。閑談細やうえけれが。親兵衛馬上頭と低て听作
 坐不感涙の進むと覚む長嘆して果せり。至誠の必や神の如く大塚主の
 孝順忠信への及ぶ所も誠心誠意。徳も最厚しとも敦らむ。身
 あふ不測の援とて相逢ふをばけや。我身の必敵の鎧刺れて身いとの
 坑命終らば人知むをさげられ。然るに再生の洪恩と千言萬句の盡すも
 嗚るべし。是れ此上る幸ひる哉。就て咱等へ。姥雪直塚の伴當
 兵を領て今朝もから来る程。料もゆけり。這馬の足撥任せし御曹
 司の御危戦を援けなり。且勅敵長尾景春と敷き破り走らせ。其子長尾
 為景と擒せり。又那河鯉佐太郎の政木大全孝嗣石龜次因太越卿三と
 三人共幸ひやてかの折死る。月屬西國河原。向水五十三太が宿所在り。

我より先御曹司の聞戦を援けし。長尾と柱を力戦せり。都て是れ
 まも。會話の言れども。枯草敏然外下馬。屍を擡り石を自を
 那里故。松の下に結縷草あり。鶴を軍卒。及那里。俱の意衷を撃
 せ。との信乃も見えり。現那松蔭をよ。ゆれ和殿。据り。筆て。知。原未
 御曹司も亦御出陣せり。長尾と戦ひ。伏部語云。燈臺の倒。下。閣。て
 今筆て。鈍。況や。政木。石。龜。最。井。珍。説。人。又。所
 俱の馬を歩かせ。徐に松の邊。造り。下馬。と。餘
 擊。大。銅。現。八。杉。倉。直。元。田。税。逸。友。真。間。井。秋。季。頭。人。隊。長。陸。續。と。信
 乃。兵。を。從。へ。寄。隊。の。兩。將。顯。定。成。氏。の。敗。れ。走。り。と。趕。捕。へ。ん。と。索。ね。て。あ。の。あ。け
 る。信。乃。が。一。個。の。若。武。者。と。共。侶。小。憩。ひ。居。る。と。逢。見。て。現。八。を。自。餘。の。隊。長。と
 俱。の。馬。より。下。り。找。し。り。信。乃。の。身。を。大。塚。和。殿。の。顯。定。主。を。那。里。へ。趕。上。り。る。

八代傳九卷 卷四十一

大澤堂主



去のせう
 信乃松下
 えめを
 君命を親
 へあつこ
 兵衛おつこ

親兵衛河と応て身を引降して跪け信乃が命を。曩も洲崎の御陣を。館
 崎の軍令を定させぬり時大坂毛野を軍師お做され並和殿と我門七名の
 俱に防禦使さるべしと仰渡されて且即刀お擬せれる。御大刀と各一口賜て這
 回軍旅の間備軍令不違ふ者あり先斬て後お告よと旋るるに余余の折和
 殿と大村大角の御使して他御お在れば和殿お賜るを。則ち咱等も遣與ぬ又
 大角お賜ると現八預けぬは。咱等も地の出陣の始より其御大刀さへ
 腰お帶て身お帶刀の三つを數ぎ且青海波の名馬さへ奉せ多る心操の御解
 示せし如し。余余和殿折も。今日の御陣よかり多し且軍功の拔萃るるのいさ
 君命と美らして防禦使の大任重く。求て館の御本意お稱ぬ。武
 門の真加あまの。一期の面目羨むべし。卒々御大刀と遣與ん。と。いふ。願て腰に
 撈りて三刀佩する。中の一刀と取れ親兵衛の謹て受戴る。腰お佩て身と

退せし答る。臣も京師を。權相の爲に豪留せられて。聖御使と果し。危
 窮存亡の時をも。知る。身の他御お在りける。君恩當分の義兄弟。異なる。取を
 仰せられ。身を措か所なき。辱く拜戴受納。休却大村の何もの故。他御へ遣
 去ゆりや。と。向ふを信乃の推察。ゆる。否る。多。此事由。われ。今。明々。地。お告。か。ら。り。
 そ。後。お。て。知。ら。せ。けれ。と。答。て。現。八。を。見。う。る。と。大。飼。の。折。大。村。お。賜。る。御。大。刀。の。お。
 今。も。猶。お。れ。や。と。向。へ。現。八。然。る。と。那。御。あり。後。異。日。隊。配。と。定。め。れ。て。咱。等。の。
 和。殿。と。共。侶。お。御。曹。司。不。従。い。ま。う。て。る。地。の。寄。隊。も。向。へ。大。村。お。遠。く。の。然。る。
 役。果。され。他。の。件。の。仰。を。使。々。御。大。刀。と。遣。與。ま。く。も。お。因。て。當。日。軍。師。と。就。て。情。地。不
 御。旨。と。請。なり。館。聞。召。て。開。我。思。ひ。足。ら。所。り。現。八。と。返。辟。お。替。り。大。角。お。値
 遇。せ。り。他。も。亦。大。士。と。明。徴。お。知。れ。り。と。狭。き。縁。故。の。件。の。大
 刀。と。現。八。お。與。り。今。隊。配。と。定。る。方。り。不。便。不。宜。開。い。の。

儘毛野渡まけの。ね大角おほかく。別人わかひとをりて遣美おとせ。と仰おほせ。り。六那御むねのみ。大刀おほやち。洲崎すまき。中なかつ。そが儘返まげ。し。あ。を。大坂おほさか。を。渡わた。與よ。し。と。聲こゑ。低ひ。や。く。ふ。谷や。折お。り。く。姥お。雲くも。代よ。四よ。郎らう。直ち。塚づか。紀き。二に。三さん。漕そう。地ち。喜き。勘かん。太た。老らう。の。伴とも。當あ。野の。兵へい。並なら。小こ。政せい。木き。大だい。全ぜん。孝こう。嗣じ。石いし。龜かめ。次つぎ。因よ。太た。越こ。躰た。三さん。白しろ。水みづ。五ご。十じゅう。二に。太た。枝えだ。獨ひとり。結むす。素す。多た。吉きち。且かつ。二に。四よ。的てき。と。須す。々々。利り。が。下した。の。兵へい。ま。も。長なが。尾お。景けい。春はる。の。像さう。長なが。る。直ち。江え。包ひ。道みち。卓たく。佐さ。美み。職しやく。政せい。と。力ちから。戦いくさ。て。敵あか。り。追お。走し。せ。て。四よ。下した。敵あか。の。在あ。る。方はう。あ。俱お。小こ。隊たい。の。兵へい。と。從したが。へ。猶なほ。親お。兵へい。衛ゑ。を。援たす。ん。と。索もと。めて。這こ。里り。小こ。ま。ま。け。れ。親お。兵へい。衛ゑ。是こゝ。を。勞らう。せ。孝こう。嗣じ。以も。下した。新あらた。參ま。の。毎ごと。と。則すなは。ち。現あら。八はち。並なら。直ち。元げん。逆ぎやく。友とも。秋あき。本もと。亦また。小こ。徳とく。々々。と。生な。り。是こゝ。を。引ひ。合あ。ふ。小こ。大だい。家け。其その。義ぎ。旗かた。勳いさな。軍ぐん。の。大だい。功こう。也なり。と。稱せう。賛さん。と。浩こう。処じょ。小こ。葛か。西せい。二に。郎らう。在あ。る。村むら。長ちやう。故こ。老らう。社しゃ。客かく。毎ごと。針はり。脛しん。衣い。て。鎌か。竹ちやく。槍しやう。と。携た。り。方はう。が。幾いく。隊たい。の。里り。見み。の。防ぼ。禦ご。使し。を。索もと。めて。俱お。小こ。勝しょう。軍ぐん。の。壽じゆ。詞じ。を。唱な。り。且かつ。小こ。人にん。毎ごと。年ねん。末ま。里り。見み。殿でん。の。仁に。政せい。と。昔むかし。恭こう。ひ。ま。り。の。人ひと。を。擣う。小こ。寄よ。隊たい。の。敗ま。北きた。あ。身み。と。追お。殺ころ。せ。て。一ひと。人にん。も。脚あし。を。立た。ま。さ。さ。ひ。な。さ。れ。ど。も。敵あか。の。首くび。を。捕と。る。

と。と。鏡かがみ。一ひと。の。つ。と。傳つた。て。て。の。首くび。級きゆう。の。齋さい。の。の。開ひら。か。中なかつ。小こ。泚し。我われ。殿でん。の。權けん。臣しん。を。横よこ。堀ほり。史し。在あ。る。村むら。の。那な。身み。矢や。傷やう。の。死し。の。が。乘のり。る。馬うま。の。鞍くら。局きやう。小こ。俯ふ。さ。る。隨ま。り。來き。れ。分ぶん。捕と。り。の。以も。以も。他た。の。民たみ。を。虐あ。る。奸かん。佞ねい。の。少せう。え。あ。る。者もの。也なり。既すで。ゆ。と。死し。に。な。れ。小こ。人にん。毎ごと。年ねん。末ま。里り。見み。殿でん。へ。孝こう。順じゆん。の。證あき。不ふ。せ。ん。と。其その。首くび。斬き。り。持も。參ま。仕し。の。ひ。ひ。小こ。又また。今いま。來き。る。路みち。を。亦また。失し。傷やう。の。死し。の。が。落お。人にん。あり。他た。の。則すなは。ち。在あ。る。村むら。が。次つぎ。職しやく。を。同どう。惡あく。の。佞ねい。人にん。新あらた。織お。帆はん。大だい。丈ぢやう。素そ。の。を。知し。る。者もの。の。告つ。ぐ。そ。開ひら。か。首くび。捕と。り。て。の。參ま。り。ぬ。の。を。實じつ。檢けん。と。賜たま。ひ。と。か。を。く。想おも。へ。二に。級きゆう。の。首くび。と。ま。り。と。ま。り。と。信しん。乃の。引ひ。き。と。得え。と。檢けん。て。這こ。在あ。る。村むら。と。素そ。の。の。擣う。小こ。我われ。が。射や。り。て。斃あ。せ。し。我われ。君きみ。仁に。義ぎ。の。御ご。軍ぐん。令しやう。れ。も。這こ。在あ。る。村むら。素そ。の。の。君きみ。と。恐おそ。い。一ひと。國くに。を。謬ま。し。罪つみ。死し。を。容ゆる。さ。る。惡あく。人にん。の。れ。必かな。ず。鼻はな。首くび。を。切き。り。て。大だい。義ぎ。を。と。勞らう。り。現あら。八はち。も。亦また。村むら。長ちやう。も。亦また。向むか。ひ。て。若わか。し。め。あ。へ。來き。り。て。便べん。宜ぎ。の。約やく。莫な。し。今いま。の。聞き。戦いくさ。の。敵あか。の。人ひと。自みづか。家け。中なかつ。の。陣ちん。殺ころ。の。者もの。を。あ。ら。ひ。其その。亡な。散さん。と。拾ひろ。集あ。り。て。便べん。宜ぎ。の。寺てら。院いん。へ。瘞や。む。下した。の。を。親お。兵へい。衛ゑ。の。衛ゑ。と。せ。て。大だい。塚づか。犬いぬ。飼かひ。而して。賢けん。兄あに。の。の。患あ。を。ん。殘ざん。克く。殺ころ。を。去さ。る。ハ。則すなは。ち。館くわん。の。

八尋山傳卷第二十一 九

御本意を遂げ然る今日聞戦自家の仇を敵との陣殺して還るるは
 皆是忠臣たるに似る。然るに其死を救ぎて埋め壊ふ做るは長く怨と結ん
 の各々位も知るぞ。我不死の仙丹の姫神授與の神茶も深痛死したる
 者との二晝夜二十四時の中を蝨く是を用れ死を起して生か回せと
 言ふ。早天の枯る苗の甘雨を浴て勃然と起し速く其経験の如く比素藤
 不敷を御曹司の伴當の皆魁生りしを見て知るべし。是は何れと請談
 され信乃の所教にて現大江が掃る所婦人の仁に似たる。是の者も
 我思ふ所の如く。夫博く愛するは則天地の心を敵多る。仙丹の活
 して還し遣さば必や兩管領も後竟我君の大仁至徳に感服して悔
 々怨を解るべし。意ふ今日聞戦返り合せし戦死ある。寄隊の遊軍
 紀内外助及建柴某乙又許我の近習る。科草を喚做る。杜伎の
 俱恥を知り君を將として恩義の為陣殺ある。倘

是等と活し善と勸る一術を説き現八推林某も亦唯我同意
 る。大江が所云不死の神茶の僅一箇の茶龍を獲るる。敵と自家の
 瘡戦死千百人を送る用る。是を足る。詰ると詰ると親兵衛某乙
 其疑ひの理を。我神茶の幾十人を用るとも盡る。是を足る。詰ると詰ると
 親兵衛某乙其疑ひの理を。後中も是を用いて刺分ち一茶龍を焼雪の
 腰に帯させ。故の隨て毫も減らぬ。心の易かる。と解れて現八感服
 して又よりもる。登時大江親兵衛の村長某乙も向ひて若
 們目今は何ん我不死の神茶を敵と自家の兵の死を救ぎ
 欲する。是を用いて験る。命數盡て免れる者。然るに積悪隱
 匿の牙人よそをばれ其魁らるる亡骸の集めたる野の大坑に垂
 れ下りて我疑ひ思ふ。その那底不知と喚做。坑の敏系は某
 某乙掩れ。行きて溜休者の年々。わん小若們何ぞ埋るや。と問
 へば村長某乙は。其是仰でいへ。那坑の昔

より埋めまぐ欲まる。底深ければそのくわを。試み石を投入れ。水音幽かな。折
 あり。然れば底の地熱耶。捺落の積たけん。あつて誰のふ。お底不知とを喚
 傲ひなれ。と言真実立。陳まれば。親兵備守。沈吟して。井の亦奇に。るれ。我徳
 行て騎馬。那坑の陥。小下る受る者あり。飲底まで至る。故に其水。あやむ
 ぞと知ねど。力と竭。一日と累。る埋め。埋め坑。あつんや。と詰ると。信乃の諾るひ。
 我もあつて。思ふれ。因て。あふ思。安あ。嘗聞。五十四。河原の岡。山は原。是土民。們
 暴。河の。流を。流ひ。折其。壤の。遣る。方。を。あ。心。とも。る。築。成。る。と。り。渡。莫。那。岡。僅。お
 暴。河。を。隔。る。もの。る。國。府。臺。と。相。對。の。敵。備。那。岡。小。据。る。と。あ。城。を。守。る。為。不。害
 ありて。利。る。る。る。べ。然。る。も。礼。不。を。や。國。不。畢。言。は。卿。大。夫。の。恥。我。異。日。凱。旋。の。折
 あ。の。美。を。館。不。吟。え。わ。は。て。必。那。岡。を。明。さ。せん。非。如。る。路。近。る。も。も。民。皆。畊。稼。の。暇
 あり。毎。日。と。思。ふ。の。年。と。麻。着。も。一。簣。一。車。の。功。成。る。愚。公。の。山。を。移。ま。至。ん。然。る

思ふや。と。ち。譚。へ。信。乃。現。八。等。の。信。乃。直。元。逸。友。秋。本。季。も。政。水。燒。雪。以。下。の。母
 も。件。の。論。議。を。感。佩。て。其。英。才。と。羨。と。ける。あ。つて。義。成。主。の。次。の。年。より。葛
 飾。二。御。の。民。不。課。て。五。十。四。田。の。岡。を。鋤。除。せ。り。底。不。知。の。坑。と。填。め。ま。せ。あ。ふ。民。比。皆。其
 盛。徳。と。慕。ふ。の。故。不。招。れ。る。聚。合。を。て。其。役。を。極。め。り。僅。お。一。稔。可。あ。り。件。の
 岡。を。鋤。執。畢。り。て。件。の。坑。と。填。め。果。一。の。義。成。主。又。土。民。五。稔。の。調。貢。を。饒。り。て
 其。頭。の。曠。野。を。送。る。鋤。せ。て。新。田。開。發。の。美。を。教。め。ふ。民。皆。欣。び。て。勉。む。る。者。る。り
 あり。井。も。二。稔。可。あ。り。て。新。田。を。用。て。數。百。貫。及。び。り。永。く。公。私。の。有。益。を。る。り。然。る
 る。課。役。の。葛。西。二。御。の。衆。民。と。安。房。藩。中。の。吏。人。と。心。同。一。力。と。勸。せ。害。を。除。利。を。興。り
 あり。時。の。人。を。新。田。を。名。づ。け。二。御。藩。と。を。喚。做。し。後。の。人。二。合。半。を。作。る。同。所。る。ん。歟
 且。今。も。葛。西。假。名。町。の。真。道。新。田。村。あり。是。れ。も。其。餘。波。る。ん。歟。左。も。右。も。れ。道。徳。仁
 義。の。君。臣。の。迹。仰。ぐ。べ。り。是。後。の。語。へ。看。官。前。後。と。照。り。て。見。る。べ。り。

神藥施一得敵兵再生を
第百七十四回

現八箭を抜て水死の將を救ふ

ひのぬえあべ系。て死へいさのせい。敵自家の差別を。刀瘡見及陣殺の。兵毎神授の仙丹を施してのく死を起し生を回さく欲する不則信乃現八箭と商。量多て真間井樅二郎秋季と施茶の頭人にて代四郎紀三六喜勘太の三名と。ゆて其副とも他等の這神茶を用るゆと其事小熟れ然る真間井秋季の隊。兵四五百名と從へて代四郎紀三六喜勘太等と共に這葛西の村長莊客と母を。案内ゆて既立おんとあける程小衛長尾景春と戦あて俱小瘡を負あて小。まる須々利壇五郎二四的寄舎五郎の下の野武士を杖掖れて索なて這果。束おけれ親兵衛芳ひ勤り腰小吊る茶籠より又神茶と會合して其瘡小布。まら疼痛立地の袪れ瘡愈て心地清きふ做りて寄舎五壇五の秋ひ小堪を

二度の恩恵心再生あ幸ひありと云親兵衛小感悦の詞を聲一々且信乃現八直元。逸友秋季小初對面の袪ひを演るごま迷の口誼ハ具おせ者官是を本直元。當下村長莊客們的仁が神茶係まら即效の至妙多を見て胆を洗つ感。佩して其君仁慈小御坐せ其臣亦かの如神茶とて敵自家の死を救神。童あり是豈凡夫の所為るんや俱神人多べそを馮心く思ひけり徳而施茶の。頭人等の五百個の隊の兵と村長莊客們を領て又戰場へ赴ふ施紗の神茶を。量裏小親兵衛が分ちて代四郎小預ける一茶籠を事足れと今ゆ別授る小。及るも只親兵衛の代四郎紀三六喜勘太門の町寧小敬言めて人の命千金より重。かる更上直塚も喜勘太ものまをわねども今日施茶の我私の生賢を做は。あむむ便是館の御本意を死心小報ふ徳とゆて其覺るを俟美あれ敵。りとも等閑る一人も多く救ふを善とを限るゆのせよとをたねと諭示其代四

郎紀二六喜勘太們秋季亦亦共侶小あるる果ても罷りける。姑且まで五十二天
 素多吉の御高小政本孝嗣が樋口維龍を刺斃する。鎗の精妙事光景箇様
 箇様とのひ出て三天下説云を孝嗣急推禁めて已ねく。哥々をよむま
 下の何うわんとのひ々親兵衛よろち向ひく。在下今日闘戦長尾が隊長雑兵
 さへ幾人欲斃死あかとも素より名利の爲にせよ。其首と捕らむひん。後美
 下里見殿の御軍令敵の首と捕る者は是軍功の二町也。必重賞まべん。と
 捉まきあひくと人の告るあるる。てて。虚言をらんと思ひ小和君所藏の神茶を
 のて敵の死ととも救んとある。至仁の計議照して見れば。実仁君の御盛徳感
 る。餘り敬服至極仕りぬと謝まれば。親兵衛信乃現八も孝嗣の今番の
 去。義小素藤と對治の折也。敵の首と捕らむとせ。心操とを言ふ。當下
 直元逸友の信乃現八に向ひて。面君の思ひる。今約莫這回の大奇

事。那野猪の初寄隊の戦車と焼て三面敗績。時那野猪の敵
 刺せ火中焼れ掻消去と見え。最怪むる。寄隊の二將返
 去。三面死を争ふ戦ひ。渾る。時件の野猪六十五頭。又忽馬と出て。未
 せて。寄隊の騎馬を馳け。幫助もよ。使速小守の備。那野猪微り。他
 人の知を。卑職等の成氏主の一陣と敗り。難を勢。又と告れ。現八點頭。開
 亦。咱等も同意。那野猪の幫助もよ。然。骨を折ら。寄隊の副將を
 生拘ゆ。寔不可賀。々と祝せ。信乃も笑局。入て却親兵衛。小任。と雷。雷猪の
 事の顛末を告。親兵衛感嘆して。咱等も亦京師。在り。時故画の虎。小雷。雷
 捕て。抜。山。入り。と管領政元。主の爲。對治。まける。奇談あり。其首尾。ハ箇
 様々々と。徳用堅削の毒。惡政元。主僕。の奸詐。並。五虎の確執。横死。及。秋。條。廣
 當が賢才の計議。ま。當時の崖略。を。詳。小説。示。せ。信乃現八。ら。公。由。り。大。家

の。憊る必死の毎由共亦再生の某の驗あり。代四郎ハ腰ヲ帶ル神某と
 一個々々其古余命にして且瘡口ヲ某と布く。輕ん即時ハ甦生るもあり。重
 然一時或ハ二時之時の程ハ呼吸止む。皆我ハ復々甦る。登時秋季與保某ハ
 再生の敵兵を勅り慰め。里見殿の軍令ハ箇様々々と仁義の要領を説示。閑
 閑戦ハ已とせざる所也。其本意ハあつた。あつた。自家の士卒ハ今して
 專當の敵と較ぶ果きとも首を捕ると功とせしむ。既ハ勝負定めて閑戦
 果ても首実檢とせしむ。仁慈ハあつた。あつた。非如敵の士卒ハとも戰
 難義不及時君の爲ニ戰死者ハ則是忠臣誰ハ憐むらざる。其陣
 歿の毎ハ大江親兵衛ハ神授の仙丹をり。半て返レ遣まべし。御曹
 司の御説ハよく。我ハ施某の頭人ハ汝連降んと願ふ者ハ則留めて召
 使つべし。又其本貫ハ還らむ。欲者者ハ隨意返レ遣まべし。其の某ハよくて

主張せよ。と言可寧論示せば。大家夢の覺る如く。其大仁と神某の經
 驗即妙なるを感び。感涙坐不杖む。敬服せざる。然れども
 有名の勇士も。再生の恩も。降參せん。放ち遣られんと。願
 願ふ者も亦。秋季與保某の某を以信乃現八親兵衛不報て。且義
 通の下知も。放免せざる。寄隊の頭人ハ。絶内外助。建柴浦。小
 二郎。梶原。後平。二。秋野。五九郎。科。草七郎。望見。一郎。是れ。余の餘猶あり。下
 然。其の頭人等。異日君邊。あかり。里見の仁心。箇様々々と神某施
 仍の言までも。詳ハ告り。顕定。景春。駭嘆。して。懲りて。後悔。せざる。事
 あり。をり。里見。數世の後までも。山内。扇谷の。兩管領。ハ。敢境を。侵さ
 ゐ。る。一。口。この。一。奉。お。より。て。間。話。休。題。の。日。又。神。某。の。奇。效。お。より。て。再
 生。る。寄。隊。の。雜。兵。の。は。は。降。ら。んと。願。ふ。も。多。く。是。等。ハ。皆。國。府。臺。の

城(駈)入(り)て軍役(ふ)充(れ)けり。或(は)又(は)敵(の)士(卒)の神(某)の效(あり)て、魁(ら)ざる者(の)亡(骸)へ是(命)數(限)りある者(然)らば其(性)不(仁)なり。積(悪)の者(る)べし。那(在)村(と)素(仍)死(首)と土(民)不(捕)ら(れ)て再(生)の便(著)あり。ま

す。これ天(四)訓(の)其(下)に者(も)亡(骸)のそ(人)並(不)聚(合)て底(不)知(野)る。坑(は)藏(め)て葬(る)未(及)び。倭(而)こ(の)次(の)年(小)岡(山)の壤(ど)り。件(の)坑(を)填(り)果(し)時(國)府(吉)室(の)守(城)の頭(人)真(間)井(樞)二(郎)秋(本)季(継)橋(綿)四(郎)高(原)宗(相)謀(て)那(坑)の迹(を)塚(の上)石(像)の地(藏)菩(薩)一(軀)と造(立)し。土(俗)是(を)底(不)知(の)千人(塚)とを喚(做)けり。亦(後)の話(に)却(説)大(飼)現(八)信(道)の隊(の)兵(多)く從(て)權(且)假(名)町(小)陣(を)移(して)寄(隊)の二(將)頭(定)成(氏)景(春)の敗(北)の往(方)と探(り)極(る)小(比)皆(大)河(を)う(ち)渡(して)往(方)も知(る)り。云(民)の朝(心)紛(れ)る。此(を)現(八)守(て)ま(ら)ん。ゆ(ゑ)不(居)んも亦(要)る。疾(岡)山(へ)參(ら)ん。次(の)日(の)曉

天(小)田(税)力(助)逸(友)と共(侶)假(名)町(を)退(陣)を連(り)不(士)卒(と)い(そ)ぎ。岡(山)近(くる)隨(先)雜(兵)を走(せ)せ。陣(營)小(告)宣(者)一(小)義(通)君(の)昨(日)自(家)の全(勝)の夢(え)あり。時(東)六(郎)計(ひ)稟(して)國(府)吉(室)へ歸(城)をぬ(ぬ)る故(不)當(所)の陣(營)を老(煉)の士(卒)一(千)有(餘)をり。守(ら)せぬとゆ(え)り。現(八)力(助)等(八)岡(山)へ至(る)未(及)び。這(方)の岸(小)多(く)維(地)措(れ)る戰(艦)先(逸)友(と)士(卒)と載(て)前(岸)へ渡(り)果(さ)せ。却(現)八(は)胡(意)隊(の)兵(二)十(名)と好(て)徐(小)艦(を)うち(乗)り。漕(せ)前(面)へ渡(り)けり。あ(ら)士(卒)搗(合)混(乱)さ(せ)ど思(へ)る。浩(処)小(探)甲(は)一(個)の武(者)の浮(屍)骸(骸)海(の)こ(る)流(れ)を今(横)走(る)艦(小)堰(れ)係(り)て流(れ)もあ(ら)ざ(り)けり。現(八)心(も)も(見)疑(ひ)訝(り)て。眼(を)定(めて)猶(と)く見(れ)寄(隊)の將(品)者(あ)ら(む)頭(鎧)の火(形)白(銀)る。眉(額)黄(金)る。水(透)徹(り)て。隱(々)と見(く)光(景)宛(小)年(魚)の走(る)如(く)澤(瀉)の花(の)倫

び不似おほれは現ま八はのはくく訝うりて肚裏はら不お思もやう。昨日きのうも亦また隔ま昨きのうも岡山下おかやまののは開戦ひらひらせていたりとむむああやや。ああままちちらららら久く。ああちちかかれれまま。寄隊よのは一個いっのは仇武者あやむし者ももも誤あやままりり。這頭このは河が不お陥おて溺死おぼれれままるるももああるる今いま引揚ひげていららるる。よよくく檢けんせせまま我われ疑ぎひひをを解とくくよよりり合あいいんんとと尋思まわわんんををああららせせるる聲こゑとと立たてて。登のぼるる兵へい毎まい今いまああのの艦くさね不お流ながれれ係かりりててああるる。那あの屍骸しかいとと被揚ひたたれれよよとと叫こゝべべ高師たか師し們ら阿あとと忘わるる。一ひと人ひとり又また蝮へびくく釣つるる。索くわももりり。件くだのの屍骸しかいとと掛かけけ止とめめらられれ。自餘よのの高師たか師し力ちからとと勅あまりりてて。連つりり不お艦くさねとと漕こぐぐ程ほどのの艦くさね不お駛はりりてて前ま面へのの岸きにに寄よりりけけりり。然しかししもも現いま八はちち尚な尚な岸きにに登のぼるる。今いま係留けいりゅうするる浮死うた屍しかい。骸がとと艦くさね不お被登ひたたれれ。是これをを見みるる果たまららずず。寄隊よのの大將だい將しょうををああららせせるる。是これ人ひと年とし齡とし二に十じゅう許ごのの面おものの色いろ白しろくく眉まゆ厚あくく。相あいいまま野のらら。身み上かみ上かみ結むす絨じゆうのの薄うす鍔つばのの上かみ上かみ梧わ桐どう不お鳳ほう凰おうのの浮う紋もんああるる。故ゆにに金きん襪わのの戦いくさ袍ほをを披ひたたれれ。鼻はな皮かわのの尻しつ鞆たもとにに掛かけけるる。黃わう金きん裱びょう装そうのの大だい刀とうとと佩ひららけけるる。開ひらくく乳ちちのの上かみ上かみ三さん寸すん許ご。膠か托たくのの外そとをを射いらられれるる。征せい登とう前ぜん一いち枝え花はな深ふかくく直ちくくをを儘ままととれれるる。且かつ頭あたま鍔つばのの眉まゆ額かぶをを又またくく見みるる不お純じゆん金きん也なり。

彫う彫う一いちのの竹たけ均ひら小こ群ぐん雀すずめのの花はな髯ひげののけけれれ。原もと来きた是こゝのの後のち生なるる。豫よ聞もん徳とく口くち寄よ隊たいのの一いち將しょう扇せん谷や定じやう正せいのの嫡ちやく子こああるる。上かみ杉すぎ五ご郎らう九く朝あさ良ら王わう歎なげ然しかららずず。定じやう正せいのの處ところ長なが子こ也なり。洲しゅう崎さき寄よ寄よ水みづ軍ぐんのの副ふく將しょうとと上かみ杉すぎ式しき部ぶ少せう輔ほ朝あさ寧ねい王わうのの要えいををああららせせるる。尋思まわわんんととああららせせるる。其その前まへをを見みるる。板いた合あひひてて見みるる。前まへ幹かん不お漆しつせせるる。四よ箇かんのの細こ字じああららせせるる。大だい山さん忠ちゆう與いとと讀よめめらられれるる。現いま八は憶おぼええ悒あ然しかららずず。肚裏はら不お又また思もやう。原もと来きた昨きのう日ひ水みづ路ぢのの寄よ隊たいとと水みづ戦いくさのの勝かち負ひあありり。時ときのの朝あさ寧ねい王わうをを道みち節せつ射いらられれるる。水みづ中なかへへ落おちちせせるる。然しかししももああららせせるる。這このの屍骸しかい安やす房ぼう不お相あ摸ものの浦うらよりより流ながれれるる。一ひと宵よ經へいててああのの暴は河が不お漂おひひ入いるる。今いま我われ艦くさね不お掛かりり。一ひとのの稍しやう是こゝをを知しるる事こと不お用よう意い不お也なり。不お用よう意いををああららせせるる。前まへよりより約やく束た束たああららせせるる。如ごとくくのの噫あきき奇きるる。妙た妙たああららせせるる。水みづ底そこ不お沈しづむむ。浮う流ながれれるる。亦また奇き人ひと意い不お這こ鍔つばのの薄うす鍔つば也なり。水みづ不お入いるる。由よし沈しづむむ。那あの南なん倭わ刀とうのの類るいもも然しかららずず。琴こと高たかくく浮う劍けんのの類るいもも然しかららずず。左ひだりにに

右もあれ。是れよ。精まる。昨日洲崎の澳。必寄隊定正主の大軍と
 水戦ありて。大阪が謀る所。八百八人。仍れて。敵を血せしむ。あれども
 昨日。這里。寄隊の士卒の陣。致あるま。大江親兵衛が仁術をり。く
 多く生いて返せ。人の人は是寄隊の總大将。定正主の愛子。らん。ふ
 知り。其死と救のむ。我君大仁博愛の御盛徳。不欠る所。ある。似て。後ふ
 悔く。思ふ。とも。あらん。然。是。亦。知る。べ。然。ひ。く。人の人。矢傷。身。負
 みて。水中。小。落。より。大洋。數十。里。と。漂流。す。既。一。夜。を。懸。止。らん。非。如
 大江が神業。あり。とも。救。ひ。ゆ。く。か。べ。れ。と。思。へ。とも。先。親。兵。衛。告。告。商
 量。す。亦。不。如。と。吐。小。腹。小。答。く。主。意。既。決。り。一。身。一。個。の。雜。兵。を
 墓。の。城。へ。走。り。せ。親。兵。衛。小。美。を。告。く。那。神。業。と。乞。せ。く。親。兵。衛。告。告。時。を
 程。した。伴。當。才。小。二。三。名。を。お。く。其。使。と。俱。小。あ。け。れ。現。八。則。親。兵。衛。と

艦。小。請。兼。甘。席。と。讓。り。て。告。る。と。上。小。寫。あ。如。く。且。其。意。衷。と。鮮。示。して。件。の
 屍。骸。と。見。せ。く。親。兵。衛。隨。即。檢。一。畢。く。現。八。小。向。ひ。て。命。う。大。飼。和。殿。の。推
 量。妙。え。あ。る。寄。隊。水。軍。の。副。將。と。す。え。朝。寧。ある。と。違。ふ。べ。く。人の人命。數
 い。ま。盡。た。む。且。平。生。隱。匿。る。く。死。て。二。四。時。を。過。ぎ。活。ま。生。ず。る。と。あ。らん。や
 然。今。あ。の。死。を。救。え。拘。置。く。那。大。敵。と。い。く。懲。ま。不。足。り。ぬ。べ。あ。の。美。を。異。日
 大山が傳へ。知。る。と。あ。ら。ん。さ。る。腹。と。立。げ。れ。ども。あ。る。道。即。が。仇。の。子。を。正。敵。と
 あ。ら。ざ。れ。ば。飽。ま。ず。盡。ま。る。要。る。所。仍。之。実。和。殿。の。意。見。の。如。く。是。等。の。人。を。活
 ち。置。む。館。の。仁。慈。天。地。小。あ。一。の。脚。盛。徳。不。違。ふ。べ。兵。每。又。蝨。く。這。死。人。の。戎。衣。と
 脱。せ。よ。と。小。雜。兵。あ。ら。ぬ。て。找。し。寄。る。者。兩。三。名。左。右。して。水。死。の。武。者。の。戎。衣。と
 鮮。果。一。の。親。兵。衛。則。腰。と。撈。ア。そ。不。死。の。神。業。と。合。出。す。先。死。人。の。口。中。へ
 兩。三。番。推。入。れ。て。又。その。矢。傷。へ。推。入。れ。つ。そ。上。小。又。某。と。布。給。る。ど。く。又。其。胸

膈へ塗り畢く。却に筋力ある雜兵が吩咐て死人を倒し抱せり。徐小推立
 其腹内なる所の潮水を吐き出し、壁壘を轆一とせり。其口より出る
 水幾許あると知れ既や吐盡せし時、推居させ是を見る。初土の如
 く、面総身稍血色と出、来て中腕温熱ある似、親兵衛ら
 歎びて憐て、這人必生くべし。徐小城内へ昇入させ、臥させ、とらふ
 現八あるゆゑ、又雜兵を城へ走らせ、轎子一棹、昇せさせ、則其轎子の
 件の武者どうち乗せて、昇せし臺の城へ遣ふ。現八親兵衛の左右、立
 程、大飼が隊の兵毎も、艦より出て、轎子どうち守り、忒整、徐而大飼
 現八大江親兵衛の俱、函府其臺の城かへり、則犬塚信乃、件のゆと告
 知せり。且東辰相小就て、義通君おせえ上て、却水死の少武者とを、儘閑室お
 臥せり。士卒、是を守り、約二時許、那人遂に甦生りて、と動

又脚を動し、ほど程、稍我を復りけ、命を頭を拾ひ、己を守り士卒と見て
 うち敬馬のゆ、所以と知れ、其身のあ、在るゆと悟難、士卒お向へ、士卒則其
 義を告る、心ゆく敬馬れ、身救ふ、蘇生、果敢る、敵の城内、俘囚
 作り、悔し、さと思、ゆ、可為、徐而現八親兵衛、信乃等、義通君の
 旨と請、且辰相お告て、直元と共、侶、這蘇生の少武者を、城の、注、廳、お
 召出、其姓名、来歴、を鞠、問、詞を、卑、礼を、正、丁寧、お、慰、め
 去、少武者、里見君臣の、仁、愧、義、服、して、懶、陳、意、と、言、皆、其、実
 情と招、了、けり、是、ゆ、這人の、管、領、定、正、の、庶、長、子、を、式、部、少、輔、朝、寧、
 も、正、可、知、れ、又、昨日、洲、崎、の、澳、の、閉、戦、不、寄、隊、敗、績、存、る、事、の、光、景
 も、那里、の、告、待、び、て、這、里、の、風、く、吹、え、けり、支、得、と、失、と、天、在、り、又、人、在、り、求、
 と、死、ハ、則、得、棄、る、と、死、ハ、則、失、ふ、其、得、失、の、人、在、る、者、又、不、用、意、や、得、ぬ

るあり。小心しょうしんありて反さかて是こゝを失うしなふとあり。這得失このうの天あま不在なり人のよく做なす所ところあり。

譬たとへ言ことばハ老氏らうしの所ところ云い泰山たいしやん山さん不な貸かあり。貸か心こゝろる者ものれを得えるといふが如ごとく。看官くわんくわんあり、お意い

せよ。蓋けが這陸路このち二入ふた所の闘戦たたかふ。満呂復まんりふく五郎重時ごらうじゆうじの寄隊よせたいの大將たいしやう朝良あきらと深川ふかがわ

い磯いそお趕おこ鬼おに逼おそりて既すで不な擒かむをべりしと。反さかて大坂おほさか毛野もうのお獲えられさ。這得失このうの天あま不在なり

ま又また洲崎すまきの澳あの水戦みづいくさお大山おおやま道節みちのぶ忠ちゆう與よち上かみ杉すぎ朝寧あさねと射やて落おれさ。矢場やば

ま其その首くびと捕とる由よしありて。反さかて現げん八はち其敵そのてんを獲えられて。刺親さしおや兵衛べいゑか神茶かみぢやを朝寧あさね

ま再生まがひさす。這得失このうの天あま不在なり人のよく作とす所ところあり。是故このゆゑお曰い得えと失うしなふ天あま不在なり。又また人ひと

あ在あらう。思おもひをいあるへらぶ。世よの人の理りお暗くらけれ。惑まよふて且かつ天あまを怨うらむ人を咎とがめざる。

まる。并ならび醒さまさす。欲ほむる作者さくしやの老婆らうば深切ふかきを。是本傳このほんでんの本傳ほんでんる所以ゆゑに。越こえ先ま

ま其緒そのいとを解とく。道みち即すなはち朝寧あさねと射やる。後のち回水戦かゐみづいくさの段くだお具ぐへ看官くわんくわん前後ぜんごと照てして。

南總里見八犬傳第九輯卷之四十二上終

